

ハイデガーと形而上学の問題

細川, 亮一

<https://doi.org/10.15017/1397697>

出版情報 : 哲学論文集. 22, pp.1-19, 1986-09-20. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

ハイデガーと形而上学の問題

細川亮一

〔一〕

ハイデガーは「カントと形而上学の問題」(以下「カント書」と略)で次のように言っている。

「勿論、言葉が語っているものから、言葉が語ろうと欲しているものを聞き取るために、あらゆる解釈は必然的に暴力を用いざるをえない。しかしこの暴力はあてどもない恣意ではありえない。あらかじめ照らし出す理念の力が解釈を押し進め導かねばならない。」^{Y1)}

ハイデガーが「カント書」でカント『純粹理性批判』を解釈する際の「あらかじめ照らし出す理念」とは何か。この問いに我々は簡単に答えられるように見える。「カント書」において『純粹理性批判』は「存在と時間」の問題設定の視界のうちで解釈されている(K. XIV)のであり、ハイデガーのカント解釈は基礎的存在論の理念によって導かれている。(vgl. K. 196f.

225, 237f.) しかも「カント書」の出版の動機は「一九二九年にすではっきりした、『存在と時間』で立てられた存在の問の誤解」(K. XIV) であり、「カント書」は「歴史的な」緒論という意味で、「存在と時間」前半部で論じられた問題構成を明確化する」(K. XVI) ののである。「カント書」の解釈を押し進め導く理念は、「存在と時間」で目ざされた基礎的存在論の理念である——このことは自明であるように見える。⁽³⁾

しかし「カント書」は「カントと基礎的存在論の問題」ではなく、「カントと形而上学の問題」である。確かに「カント書」の冒頭で次のように言われている。「以下の探究はカント『純粹理性批判』を形而上学の基礎づけとして解釈するという課題を自らに課している、形而上学の問題を基礎的存在論の問題として明らかにするために」(K. I) それ故形而上学の問題が基礎的存在論の問題と同一視されているように見える。しかし基礎的存在論が形而上学全体でないのは明らかである。何故なら「基礎的存在論は現存在の形而上学の第一段階にすぎない」(K. 225) と断言されているのだから。

しかも「カント書」で主題的に解釈されているのは「純粹理性批判」全体ではなく、「超越論的感性論」と「超越論的分析論」にすぎない。基礎的存在論に方向づけられたカント解釈が「純粹理性批判」全体を主題化していないことと、基礎的存在論が形而上学の全体と同一視しえないことは、正確に対応しているのではないか。とすれば「カントと形而上学の問題」において「純粹理性批判」全体の解釈を導いている理念は、基礎的存在論をその第一段階として包括する形而上学の理念ではないだろうか。

「カント書」の第一節「形而上学の伝承された概念」でハイデガーは形而上学を次のように定義している。「形而上学は存在者としての存在者と、存在者全体との原則的認識である」(K. 8) この形而上学の定式は単なる歴史的回顧ではなく、ハイデガー自身の形而上学を表現している。彼は「形而上学とは何か」で形而上学を定義している。「形而上学は、存在者としての存在者と、存在者全体とを概念把握のために取り戻すために、存在者を超えて問うことである」(Bd. 9, S. 118)

この形而上学の二重性(存在者としての存在者の認識と、存在者全体の認識)のうちに、「外見上の分裂と、この二規定の

共属性のあり方を、存在者についての『第一哲学』の主導的な問題から説明する」(K. 8)という課題が隠されている。アリストテレス自身はこの共属性の暗がりをもろくしなかった。(vgl. K. 214, Bd. 26, S. 17) 形而上学の二重性は、学校概念の形成において、一般形而上学 *Metaphysica generalis* と特殊形而上学 *Metaphysica specialis* として規定された。「カント書」においてハイデガーは何度も形而上学のこの二重性に言及している。しかも「カント書」の表題は「カントと形而上学の問題」なのである。とすればハイデガーのカント解釈で形而上学の二重性——存在者としての存在者と存在者全体との原則的認識、一般形而上学と特殊形而上学——が何の役割も果していないとは考えられない。事実彼は「純粹理性批判」の課題を次のように規定している。「一般形而上学(存在論)の可能性への問いは、カントにとって、伝承された特殊形而上学の可能性への問いから生じている」(K. 82, vgl. K. 11)

【カント書】第一節で形而上学の二重性の問題が論じられ、「純粹理性批判」の課題が形而上学のこの二重性に即して規定されているとすれば、「カント書」全体の解釈を導き貫いている理念は形而上学の理念と言いうるのではないか。【カント書】を貫いている導きの糸が形而上学の理念であるとすれば、その糸は【カント書】の最初の節「形而上学の伝承された概念」に結びつけられていると同様に、「カント書」の最終節にも結びつけられているはずである。【カント書】が形而上学の二重性という問題から始まったように、この書はまさに同一の問題で終っているのではないか。

我々は次のように主張したい。——【カント書】は基礎的存在論の理念によって汲尽くされるのではなく、根本的には基礎的存在論を包括した形而上学の二重性という問題意識によって貫かれている。だからこそ【カントと基礎的存在論の問題】ではなく、「カントと形而上学の問題」なのである。【カント書】の第一節でアリストテレスの形而上学の二重性が論じられているのは単なる歴史的回顧ではない。そして【カント書】の最後の節(第四五節「基礎的存在論の理念と純粹理性批判」)は形而上学の二重性に即してのみ理解されうるのである。【カントと形而上学の問題】は「形而上学の問題」(形而上学の二重性)によって初めと終りを囲まれ貫かれた「カント」解釈である。⁽⁴⁾——

この主張を断言にとどまらせないために、我々は「カント書」の最終節を解釈しなければならない。最終節でハイデガーは次のように言っている。「恐らく『純粋理性批判』の基礎的存在論的に方向づけられた解釈によって、形而上学の根拠づけの問題構制が尖鋭化したのである。たとえこの解釈が決定的なもので前で立止まるにすぎないとしても。かくして問いによって探究を開いたままにしておくというただ一つのことが残っている。」(K. 238)『純粋理性批判』の基礎的存在論的に方向づけられた解釈がその前で立止まる決定的なものこそが、全体としての形而上学そのものではないだろうか。『カント書』最終節の解釈、という我々の課題は、「ハイデガーが問いによって開いたままにし、暗示しているにすぎないもの」から「ハイデガーが語ろうと欲したもの」を聞き取ることである。そのために、あらかじめ照らし出す理念としての形而上学への定位が必要なのである。

(二)

基礎的存在論的に方向づけられたカント解釈がその前で立止まる決定的なものとは何か。この問いに答えるために我々はまず、何故「カント書」がアリストテレスの問い「存在者とは何か」*τι τὸ ὄν ἐστίν*で終わっているのかを問わねばならない。何故なら「カントと形而上学の問題」でのカント解釈を導く糸が、「カント書」の最後でアリストテレスの形而上学の問題に再び結びつけられているはずだからである。

この問いは存在者への問いである。「第二哲学」のこの問いは「存在者への問いの二つの根本方向」を含んでいる。すなわち存在者としての存在者 (*ὄν ἡ ὄν*) への問いと、存在者全体 (*ὄν ἡ ὅλον*) への問いである。(vgl. K. 214)⁽⁵⁾まず「存在者とは何か」という問いは存在者としての存在者への問いとして展開される。何故なら「存在者としての存在者」への問いは、存在者全体への問いに先行しなければならぬからである。存在者としての存在者への問いと存在者全体への問いとの連関が

どれ程暗がりにとどまろうと、「しかしある観点では両者の間には一つの序列がきわだたせられる。存在者全体とその主要領域における存在者への問いが、すでに存在者としての存在者とは何かについてのある概念把握を前提している限り、存在者としての存在者への問いが、存在者全体への問いに先行しなければならぬ。存在者としての存在者一般とは何かという問いは、存在者全体の原則的な認識の可能な完遂の秩序において第一の問いである。」(K. 216)

ハイデガーは存在者としての存在者へのこの問いを、より根源的な問いへと深める。「存在者としての存在者とは何かという「第一哲学」の問いは、存在としての存在とは何かという問いを通して、より根源的な問いへとさかのぼり押し進められねばならないのではないか、すなわち、どこから (von wo aus) そもそも存在といったものが、しかも存在に含まれている諸分節化と諸連関のすべての豊かさとともに、概念把握されるのか、という問いへ。」(K. 218)「どこから存在といったものが概念把握されるのか」という問いは、「存在の意味への問い」という基礎的存在論の問いに他ならない。存在の意味への問いとは、「それから存在が存在として了解され、存在がそれへと企投されるそれ、Woraufhin」を問うことである。(vgl. Bd. 2, S. 429)⁽⁶⁾この問いにハイデガーは「時間から」と答える。時間こそが「存在がそれへと企投され、それから了解されるそれ」である。それ故「時間への (auf die Zeit) 存在の企投」、あるいは「時間から (aus der Zeit) 存在を了解すること」という表現が用いられるのである。(vgl. K. 233f.)「存在者とは何か」における第一の問い「存在者としての存在者への問い」は、基礎的存在論としての「存在と時間」への問いへと深められる。ここに基礎的存在論という理念が成立する。

しかし「基礎的存在論は現存在の形而上学の第一段階にすぎない。」(K. 226)このテーゼを我々はどう理解すればよいのか。形而上学の第二段階があるとすれば、それは一体何であるのか。「存在者とは何か」という問いにおいて、「存在者としての存在者への問い」が第一の問いであり、しかもこの問いは、より根源的な基礎的存在論の問い (存在の意味への問い) へと深められた。それ故「存在者とは何か」という第一哲学の問いは、その完遂の秩序において、基礎的存在論としてまず展開されねばならない。⁽⁷⁾しかし形而上学の二重性という問題は次の問いを含んでいる。「存在者としての存在者への問いに、

この優位が、形而上学の決定的な自己基礎づけの秩序においても帰属するのか」(K. 216) この問いは「カント書」第一節でハイデガーが立てた問いと正確に対応している。「存在者としての存在者の認識はどの程度、存在者全体の認識へと展開するのか」(K. 8) それ故ハイデガーにとっての問いは「形而上学の第一段階としての基礎的存在論がいかにして存在者全体の認識へと展開するのか」である。しかもこの問いは形而上学の自己基礎づけの問題にかかわっている。形而上学の二重性を含むこうした問題が、アリストテレスの問い「存在者とは何か」のうちに潜んでいる。——彼自身はこの二重性の暗がりを見るみにもたらさなかったとしても。

「カント書」の最後に引用されたアリストテレスの問い「存在者とは何か」が、形而上学の二重性——存在者としての存在者への問いと存在者全体への問いという二重性——とその連関という問題を内包しているとすれば、基礎的存在論的に方向づけられたカント解釈がその前で立止まる決定的なものとは、形而上学の二重性とその共属性という問題であると言えるのではないか。——我々はこのことを「カント書」最終節が問いによって開いたままにしたものを解釈することによって確証しなければならない。

〔三〕

「カント書」での「純粹理性批判」解釈は「広い意味での超越論的分析論」すなわち「超越論的感性論」と「超越論的分析論」に限定されている。それ故「カント書」における基礎的存在論的に方向づけられたカント解釈は「超越論的弁証論」の前で立止まっている。「広い意味での超越論的分析論」は一般形而上学の基礎づけという意味で、一般形而上学に対応している。そして「超越論的弁証論」は従来の特殊形而上学の批判という形で、特殊形而上学に関わっている。⁽⁸⁾ 基礎的存在論的に方向づけられたカント解釈はそれ故存在者全体の認識としての特殊形而上学の前で立止まっている。それは基礎的存在論

の理念にとどまる限り、存在者全体の認識という問題に達しえず、基礎的存在論はここで「存在者全体の認識」へと自己転化しなければならぬのではないか。とも角ハイデガーが「超越論的弁証論」を扱っているということは、存在者全体の認識として特殊形而上学の問題、それ故一般形而上学（存在者としての存在者の認識）と特殊形而上学（存在者全体の認識）という形而上学の二重性とその統一という問題に突き当たっていることを意味している。⁹⁾

形而上学の二重性とその統一性を、ハイデガーは「超越論的真理と超越論的非真理との根源的統一」に基づいて基礎づけようとして試みている。「従来形而上学がその可能性を負っている「超越論的仮象」が必然的であるとカントは言う。この超越論的非真理は超越論的真理との根源的統一に関して、現存在における有限性の最も内的な本質から基礎づけられる必要はないだろうか。」(K. 238)「真理と非真理の統一」を我々はどう理解すればよいか。(vgl. K. 134)『存在と時間』で次のように言われている。「現存在は真理のうちに存在している」という命題の完全な、実存論的—存在論的な意味は、等根源的に「現存在は非真理のうちに存在している」をともに言っている。」(Bd. 2, S. 294)この等根源性の根拠はハイデガーが被投された企投と名づける、現存在の存在機構のうちにある。(vgl. Bd. 2, S. 295)一般形而上学の基礎づけとしての基礎的存在論は、「時間から存在を了解すること」「時間への存在の企投」(K. 234f.)に基づいている。しかし「すべての企投は、——従ってまた人間のすべての「創造的な」行為は——被投された企投である、すなわちそうした「創造的な」行為にとつて意のままになしえないという仕方で、すでにある存在者全体に現存在が依拠していることによって規定されている。」(K. 228)

「時間への存在の企投」に定位した基礎的存在論を包括する形而上学の二重性は、「被投された企投」に基づいている。一九二八年夏学期の講義でハイデガーは言っている。形而上学の「この二重性格は実存と被投性の二重性に対応している。」(Bd. 26, S. 13)『カント書』最終節でハイデガーは形而上学の二重性とその統一を、被投された企投に根拠をもつ「真理と非真理の統一」に基づけている。¹⁰⁾

しかしここで語られている真理は超越論的真理である。「存在論的認識は単に真理を「もつ」だけでなく、カントが「超越論的真理」と呼ぶ根源的真理である。」(K. 119) それ故、真理の超越論的本質が論じられるこの場面で、存在を了解しなければならぬという人間の根本的必要性が語られるのである。「真理一般の超越論的本質とはいかなるものなのか。この本質と非真理の非本質は、ともに現存在の有限性の根柢のうちで、存在者のうちへと被投された存在者として、存在といったものを了解しなければならぬという人間の根本的必要性と根源的に一致しているのだろうか。」(K. 228) 存在を了解しなければならぬ根本的必要性とは何か。(vgl. K. 221, 229) ハイデガーは『カント書』第七節で、形而上学の基礎づけの問題を説明した成果を次のようにまとめている。「存在者の認識は存在者の存在機構の、経験から自由な先行的認識に基づいてのみ可能である。さてその有限性が問われている有限な認識は、その本質に従えば、存在者を受け取り規定する直観である。存在者についての有限な認識が可能であるべきならば、その認識は存在者の存在の、すべての受容に先立つた認識でなければならぬ。存在者についての有限な認識はそれ故その固有な可能性のために、非—受容的(外見上、非—有限的)認識、「創造的」直観のようなものを要求する。」(K. 228) 存在者のうちへと被投された存在者として、すでにある存在者全体のままただ中で実存する人間は、彼が創造したのではないすでにある存在者を受け取らねばならない。すでにある存在者を受け取り、認識するために、存在者の存在機構の先行的認識、すなわち存在了解を必要とする。この存在の認識としての存在了解が、存在論的認識としての「超越論的真理」を可能にする。しかし他方、すでにある存在者全体のうちへ被投され、存在者全体のままただ中で実存せざるをえないことによって、「超越論的仮象」としての超越論的非真理——「与えられた被制約者に対する制約の総体性についての概念」をめぐる仮象——は必然的である。「超越論的非真理の理念は、有限性の最も中心的な問題の一つを蔵している。」(K. 239) 『カント書』において有限性は、存在者全体のうちへと被投され(超越論的非真理——被投性)、すでにある存在者を受け取らねばならず、それ故にこそ先行的な存在了解(超越論的真理——存在の企投)を必要としなければならない事態として捉えられている。⁽¹¹⁾ 超越論的真理と超越論的非真理との統一は、人間が存在了解を必

要とするという根本的貧困さ(被投された企投)のうちにある。存在了解という人間の最も内的な有限性のうちに、「人間が存在者全体のうちへと被投されている」という事態がある。

(四)

確かに存在了解を必要とするという根本的貧困さは有限性の最も内的な根拠である。しかし存在了解それ自身は、存在者の受容に先立った存在の認識として、非—受容的である。存在者全体のうちへ被投され、すでにある存在者を受容しなければならぬ有限な認識は、しかし他方では存在者を創造しなにかかわらず、非—受容的、「創造的」、それ故ある意味で非—有限的、無限的である。それ故人間の存在論的認識の「無限性」が語られるのである。

「存在論、すなわち存在了解を必要とするという人間の最も内的な有限性に基づいて、人間を「創造的である」と、それ故「無限的である」と概念把握することに意味があり、その権利が成立するのか、まさに無限な者という理念が存在論以上に徹底的に排斥するものがないにもかかわらず。」(K. 239)

無限者としての神の認識は「直観することにおいて、直観される存在者そのものをはじめ創造する表象(K. 23)である。神にとって直観することが存在者そのものを創造することであるが故に、すでにある存在者を受容するための存在了解、すなわち存在論を必要としない。確かに人間の有限な認識は存在者を受容せず、すでにある存在者を受容しなければならず、そうした存在者を受容するために、先行的な存在認識を必要とする(人間の最も内的な有限性)。しかし存在の認識としての先行的な存在了解は「非—受容的(外見上、非—有限的)認識」(K. 36)である。すべての受容に先立っている存在の認識は、非—受容的、それ故非—有限的(nicht-endlich)、すなわち無限な un-endlich 認識である。確かにここで「外見上、非—有限的」と言われ、端的に「非—有限的」「無限な」とは言われていない。しかし「外見上」という言葉は、有限な認識

の「非—有限性」(無限性)が神の認識の端的な無限性と峻別されねばならないことを示している。神の端的な無限性とは「存在者自身を創造することにおける」無限性(K. 252)であり、人間の認識の無限性とは先行的な存在了解における無限性、「存在論的なものにおける無限性」(K. 252)である。存在者全体へと被投され、すでにある存在者を受容し認識するために存在了解を必要とする(有限性)が、存在了解それ自身は存在の企投として、すべての受容に先立ち、非—受容的、創造的、それ故非—有限的な、存在の認識である(存在論的なものにおける無限性)。存在論的なものにおける無限性は、それへと被投された存在者を認識するために必要とされる存在了解(根本的な貧困さ)の無限性として、それ自身有限性に他ならない。有限性(存在了解を必要とするという根本的貧困さ)と無限性(非—受容的、非—有限的な、先行的な存在了解)は、存在了解という一なる事態を言い表わしている。

この存在了解という一なる事態に定位して、『純粹理性批判』の「アプリアリな総合の可能性への問い」が次の形に尖鋭化される。「有限な者として存在者へとゆだねられ、存在の引き受けに依存している有限な存在者が、存在者の「創造者」であることなしに、すべての受容に先立って存在者を認識しうる、すなわち直観しうるのはいかにしてか。」(K. 36)¹²⁾

〔五〕

「しかし現存在における有限性は、「前提された」無限性なしで、問題としてさえも展開されうるのだろうか。現存在におけるこの「前—提(前—措定)すること」はいかなる性質なのか。このように「措定された」無限性とは何を意味するのか。」(K. 239)

この問いは決して形式論理的に次のように理解されるべきではない。——有限性が有限性として規定されるためには、すでに無限性の理念が前提されねばならない。——(vgl. K. 252)我々は無限性をその内実、に即して明らかにしなければならな

い。

では「前提された」無限性とは何か。この無限性は決して神の認識の無限性として解釈されえない——現存在における有限性は神の認識の無限性の理念を前提してのみ解明されうるというように。何故ならハイデガーにとって「現存在の有限性は現存在自身からのみ示され、根源的に解明されうる。それは創造された存在という理念を必要としないし、創造神の前提を必要としない——こうしたことはカントにおいて伝統的に背景にあるのだが。」(Bd. 25, S. 156) 文脈からも明らかのように、この無限性とは「存在者それ自身を創造することにおける」無限性ではなく、「存在を了解するという意味での」無限性である。

このことは「前提された」無限性における「前—提すること」に即しても示されうる。「カント書」のこの最終節で「超越論的真理—非真理」、あるいは存在の開示としての存在論的真理が主題であることを想起するならば、この「前提」が真理前提を意味していることは明らかだろう。「存在と時間」第四四節C「真理の存在様式と真理前提」で次のように言われている。「我々は真理を前提せざるをえないし、真理は現存在の開示性として存在せざるをえない。」(Bd. 2, S. 302) しかしこの「真理前提」は「存在が開示されている」という意味での真理、「超越論的真理」に関わっている。「存在——存在者ではなく——が「与えられている」のは、真理が存在するかぎりにおいてのみである。そして真理が存在するのは、現存在が存在するかぎりにおいてのみであり、そのあいだだけである。存在と真理は等根源的に「存在する。」(Bd. 2, S. 304, vgl. Bd. 24, S. 251) 「前提された」無限性は、真理前提として、現存在の開示性、存在了解の前提を指示している。存在者全体のうちへと被投され、それ故存在了解(無限性)を必要とするが故に、前—提定された無限性は、措定された無限性として、被投された存在了解を意味している。

ではハイデガーが問いとして提示したテーゼ——「現存在における有限性は「前提された」無限性なしで問題としてさえも展開されるのだろうか」——を全体としてどう解釈しうるのか。「現存在における有限性を問題として展開する」ことは、

現存在の形而上学としての基礎的存在論の課題である。「現存在の存在機構の開示は存在論である。存在論のうちに形而上学の可能性の根拠——その基礎としての現存在の有限性——が置かれるべきである限り、その存在論は基礎的存在論と呼ばれる。この名称の内実のうちに決定的なものとしての存在了解の可能性を旨として、人間における有限性の問題が含まれている。」(K. 225)とすれば問題となっている問い全体は次のことを意味する——「基礎的存在論は存在了解を前提している」——。存在論は存在の開示として、存在が了解されている限りにおいてのみ可能である。「現存在が存在する限りにおいてのみ、すなわち存在了解の存在的可能性が存在する限りにおいてのみ、存在は「与えられてゐる」(Bd. 2, S. 281) 存在論は存在了解の存在的可能性、すなわち現存在の事実的実存を前提している。ここに存在論の存在基礎という問題が成立する。この問題は「存在と時間」の最終節で触れられている。「存在論は存在論的に基礎づけられるのか、それともそのために何らかの存在基礎を必要とするのか。いかなる存在者がこの基礎づけの機能を引き受けねばならないのか。」(Bd. 2, S. 576) この問いにハイデガーは一九二七年の夏学期の講義で答えている。「存在論はそれ自身存在論的に基礎づけられない。存在論固有の可能性は、存在者、存在的なものへと差し戻される、すなわち現存在へ差し戻される。存在論は存在基礎をもっているのである。この存在基礎は哲学の今までの歴史においても何度も透かし見られ、例えばすでにアリストテレスが「第一哲学、存在についての学は神学である」と言ったことのうちに表現されている。」(Bd. 24, S. 26) この引用が示しているように、存在論の存在基礎という問題はアリストテレス形而上学における神学という規定に関わっている。我々の解釈「基礎的存在論は存在了解を必要とする」は、存在論の存在基礎の問題を通して「存在論—神学」という形而上学の二重性に会おう。ここでも我々は『カント書』最終節における決定的なものが、形而上学の二重性とその連関であることを示したのである。

形而上学とは「存在者としての存在者と存在者全体の原則的認識」(K. 8) である。存在者としての存在者の認識は基礎的存在論へと根源化された。では存在論の存在基礎としての現存在の事実的実存は、存在者全体の認識(あるいはアリス

トテレス形而上学の神学という規定」といかに関わっているのか。一九二八年の夏学期の講義「論理学の形而上学の基礎」でハイデガーは次のように語っている。「存在が与えられているのはただ現存在が存在を了解するときだけである。言い換えれば了解のうちに存在が与えられているという可能性は現存在の事実的実存を前提にしている。そして現存在の事実的実存は更にまた自然の事実的事物存在を前提にしている。まさに根源的に立てられた存在問題のこの地平において、存在者の可能な総体性がすでに現にある時のみ、こうしたすべてのことが明らかに、存在として了解されうることが示される。ここから今や存在者全体を主題とする固有な問題構制の必然性が生じるのである。この新たな問題設定は存在論自身の本質のうちにある、存在論の転化から生じる。この問題構制を私はメタ存在論 *Metontologie* と名づける」。(Bd. 26, S. 199) 存在論の存在的基础という問題が、現存在の事実的実存の前提を通して、存在者全体の認識(メタ存在論)へと導く。しかし現存在の事実的実存が自然の事実的事物存在、存在者全体を前提するとはいかなることなのか。現存在が生物として生存しうるために、自然が必要であるということなのだろうか。しかしここで現存在の実存が問われている次元が存在了解の次元である、という点を忘れてはならない。人間が存在了解を必要とするのは、人間が存在者全体へと被投され、すでにある存在者を認識するためにであった。存在了解は人間が存在者全体へと被投されているという事実を前提しているのである。現存在の事実的実存とは「現存在が存在を了解している」という事態に他ならない。それ故現存在の事実的実存が自然の事実的事物存在を前提するとは、「現存在が存在を了解している」という事態が「現存在が存在者全体へと被投されている」という事実を前提していることを意味している。「措定された」「無限性は」「被投された」「無限性として、現存在が存在者全体へと被投され(措定され)、存在を了解していること(無限性)であった。存在論(存在者としての存在者の認識)の存在的基础とは結局、「人間が存在者全体へと被投されている」という事態なのである。我々は「前提された無限性」のうちに「存在論の存在的基础」という問題、すなわち「存在論が存在的なものに基礎づけられている」という問題を見出した。しかし我々の解釈は可能なのだろうか。一九二八年の夏学期の講義で、カントにおける「現象としての物そのもの」と「物

自体としての物」との区別に関して、二つの問いが立てられている。「一、どの程度「無限性」が導きの糸として前提されるのか。二、どの程度、存在論にとって存在的名ものの、問題となるより原則的な機能がカントにおいて示されるのか。存在論は存在的名ものに基礎づけられている……。」(Bd. 26, S. 201) 現象としての物と物自体としての物は、カントにとつて別々の対象ではなく、同一の対象への表象の異なった関係である。(vgl. K. 30f., Bd. 25, S. 99, Bd. 26, S. 209) 物自体としての物は無限な認識にとつての物であり、現象としての物は有限な認識にとつての物である。カントにおいてはこの対比によってのみ、すなわち無限な認識(「無限性」)を導きの糸として、人間の有限な認識が規定される。ハイデガーにおいては有限な認識がそれへと被投されたすでにある存在者を認識するために、先行的な存在了解が必要とされる。有限な認識の有限性は、無限な神の認識という無限性を前提せず、人間が存在者全体へと被投されているという事実によって解明される。

存在論が存在的名ものに基礎づけられているという事態は、形而上学の二重性とどう関わっているのか。すでに述べたように形而上の二重性は、一方でその完遂の秩序において、存在者としての存在者への問いを第一の問いとして要求する。しかし他方形而上学の完遂と別の秩序、すなわち形而上学の自己基礎づけの秩序が語られる。(vgl. K. 216) 「存在論が存在論的に基礎づけられず、存在的名ものに基礎づけられている」というテーゼは、この形而上学の自己基礎づけ、Selbstbe-gründungの秩序に関わっている。形而上学の自己基礎づけの秩序は、存在論がその基礎である存在的名ものの認識へと転化することを要求する。言い換えれば形而上学の完遂の秩序において第一の問いである「存在者としての存在者への問い」は、存在者全体への問いへと展開しなければならぬ。形而上学の完遂の秩序と自己基礎づけの秩序において、存在者としての存在者の認識と存在者全体の認識とは相互に要求し合う。——ここにアリストテレスが暗がりのままにした形而上学の二重性とその連関が明らかになる。しかもこの二重性と統一性はその根拠を現存在の「被投された企投」のうちにもっている。現存在の形而上学は「現存在として必然的に生起する形而上学」(K. 224)、すなわち現存在の被投された企投によって必然

的に生起する形而上学として、二重なのである。

〔六〕

しかし存在者全体の認識とはいかなることなのか。メタ存在論の主題とは何か。我々は「人間が存在者全体のうちへと被投されている」という事態に定位して、メタ存在論の主題を理解しうる。

現存在の事実的実存が自然の事実的物事存在を前提していると言われた。この自然が存在者全体として、メタ存在論の主題となる。(vgl. Bd. 26, S. 199) この自然をどう理解すればよいのか。「存在と時間」で自然は、配慮を通して発見される道具的な存在様式としての「自然」、あるいは理論的態度(自然の数学的企投)において発見される事物的存在者としての物理的自然であった。この二つの自然はともに、了解、企投に定位した自然として、存在論に属する。メタ存在論の主題となる自然は「人間が存在者全体のうちへと被投されていること」に即した自然、すなわち情態性(被投性)に対応した開示性)において露わとなる自然である。【根拠の本質について】の次の言葉はメタ存在論の主題としての自然を言いあてている。「自然は根源的に現存在において、現存在が情態的―気分づけられたものとして存在者のただ中に実存することによって露わである。しかし情態性(被投性)が現存在の本質に属し、氣遣いの完全な概念の統一のうちで言い表わされている限り、ここにおいてのみはじめて自然の問題にとつての基礎が獲得されうる。」(Bd. 9, S. 155, Anm. 55)¹⁴⁾

「人間が存在者全体のうちへと被投されていること」はさらに、「存在者全体のただ中で人間が滞在するその態度」、すなわち *Wort* (vgl. Bd. 55, S. 206, 214) という問題、それ故倫理学の問題を含む。「メタ存在論的―実存的問いのこの領域のうちの実存の形而上学の領域もある。(ここではじめて倫理学の問いが問われる)」(Bd. 26, S. 199)

存在者全体への被投性は、すでにある存在者全体を意のままになしえない (*nicht mächtig*) 無力な (*Ohnmacht*) として、

存在者全体を圧倒的なるもの(Übermächiges, Übermacht)として開示する。θεῖον (Übermächiges)としての存在者, τοῦ θεοῦ がここで問われる。アリストテレス形而上学において神学, θεολογία は θεῖον すなわち圧倒的なるものを扱うとされる。(vgl. Bd. 26, S. 13) 「根拠の本質について」の次の文章はこの事態に対応している。「超越の解明によってはじめて現存在の十分な概念が獲得される。現存在というこの存在者を顧慮しつつ、現存在の神関係が存在論的にどうなっているかが今や問われうるのである。」(Bd. 9, S. 159 Anm. 56)

かくして我々は「人間が存在者全体のうちへと被投されている」という事態に定位して、存在者全体を主題とするメタ存在論に、上述の意味で、「自然学」「倫理学」「神学」が属していることを示した。これらのテーマが特殊形而上学の主題であるのは明らかである。「キリスト教的な世界意識と現存在意識に従って、存在者の全体は神と自然と人間に区分される。これらの領域にただちに、その対象が最高存在者である神学と宇宙論と心理学が関係づけられる。それらは特殊形而上学の学科をなしている。」(K. 8f.)メタ存在論はアリストテレス形而上学の二重性における「神学」、あるいは特殊形而上学に対応した形で構想されているのだから、この対応は当然である。たとえハイデガーの意図が哲学の「諸学科を破り開く」(K. 262)ことにあるとしても、彼の形而上学構想が形而上学の二重性という枠のうちに動いているのは明らかである。特殊形而上学の学科に『カント書』の解釈が定位していることは、カントの三つの問い——「何を私は知りうるのか」「何を私はなすべきか」「何を私は希望してよいのか」——の暴力的な解釈のうちに見られる。(vgl. K. 200f.)

[七]

ここでの課題はハイデガーのカント解釈がその前で立止まった決定的なものの意味と射程を明らかにすることであった。この決定的なものが形而上学の二重性とその連関という問題であることを我々は示した。『カント書』を導く理念は形而上学

の理念であり、「カントと形而上学の問題」は「形而上学の問題」によって初めと終りを囲まれ貫かれた「カント」解釈である。

かくして我々は次のテーゼをはじめて理解しうる。「基礎的存在論は現存在の形而上学の第一段階にすぎない。何が形而上学全体に属し、どのように形而上学がその都度歴史的に事象的現存在に根づいているかは、ここでは解明されえない。」(K. 225) 基礎的存在論とメタ存在論(存在者全体への問い)が形而上学全体に属している。現存在の形而上学の第二段階とはメタ存在論である。基礎的存在論は「時間への存在の企投」に基づき、メタ存在論は「存在者全体への被投性」によって成立する。形而上学の二重性は事象的現存在の「被投された企投」に根づいている。現存在の形而上学は単なる「現存在についての形而上学」ではなく、現存在の被投された企投によって、現存在として「必然的に生起する形而上学」(K. 224)である。アリストテレスにおいて「存在論—神学」として生起した形而上学は、ハイデガーにおいて「基礎的存在論—メタ存在論」として歴史的に取り返される。

『カント書』はアリストテレスの問い「存在者とは何か」の引用で終っている。この問いは存在者としての存在者への問いと、存在者全体への問いという二重の問いを含むことよって、『カント書』第一節「形而上学の伝承された概念」における、アリストテレス形而上学の二重性へと立ち帰る。『カント書』は円環としてある。『カント書』はカントの超越論的哲学の取り返し *Wiederholung* であると同時に、アリストテレス形而上学の取り返しなのである。

〔註〕

- (1) M. Heidegger, "Kant und das Problem der Metaphysik", Vierte, erweiterte Auflage, 1973 (ボン、K. 225) S. 196

- (2) 「存在と時間」の最終的な成立（成立の歴史）にとって、一九二五／二六年冬学期の講義『論理学』（Bd. 21）における「カントの発見」が決定的に重要である。
- (3) 基礎的存在論としての「存在と時間」の意味と射程そのものは、勿論自明でもなく、改めて問い返されねばならない。拙論「存在論としての『存在と時間』」（『哲学年報』第四一輯 参照）。
- (4) 拙論「形而上学としての『存在と時間』」（『哲学年報』第四二輯）註三七参照。
- (5) vgl. M. Heidegger, "Schellings Abhandlung Über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809)"²
- (6) Woraufhinの意味については拙論「存在論としての『存在と時間』」参照。
- (7) 確かに「存在者とは何か」が一般形而上学の根本的問いと等置されている。（vgl. K. 222）しかしそれはこの問いが、完遂の秩序において、まず一般形而上学（存在論）として展開されねばならないからである。
- (8) vgl. H. M. Baumgartner, "Kants "Kritik der reinen Vernunft", S. 54
- (9) 「超越論的弁証論」は「与えられた被制約者に対する制約の総体的性の概念」（A 322 = B 379）としての超越論的理性概念を論じる。この「総体的性」は「存在者の可能な総体的性」（Bd. 26, S. 198）としての存在者全体に対応している。
- (10) いかにして形而上学の二重性が被投された企投に基づいた真理の完全な本質に由来するのか。この答えは、一九三〇年になされた講演「真理の本質について」のうちに見出しうる。「存在者としての存在者の開蔵（Entbergung）はそれ自身同時に存在者全体の秘蔵（Verbergung）であり」、哲学の本質は「存在者としての存在者全体の根源的な真理への関わりからのみ規定される。しかし真理の完全な本質は非本質を含み、しかもまず第一に秘蔵として支配しているが故に、この真理を問い求めることとしての哲学はそれ自身二重 zwiespaltig である。」（Bd. 9, S. 198f.）形而上学の二重性は「存在者としての存在者の開蔵としての真理がそれ自身同時に存在者全体の秘蔵としての非真理である」という真理の完全な本質に基づいている。
- (11) 「カント書」での有限性——存在了解に定位した——は、「存在と時間」での有限性——「死という終り」に定位した——と区別されねばならない。「現存在は彼の終りへとかかわる存在において、「死へと被投されて」それでありうる存在者として本来的に全体的に実存する。現存在はそこで彼が終るにすぎない終りをもっているのではなく、有限的に実存する。」（Bd. 2, S. 436）
- (12) この問いは「純粹な自己觸発としての時間」（第三四節）として答えられる。

- (13) 「メタ存在論」という名称の解釈については、拙論「形而上学としての『存在と時間』参照。
- (14) この自然はギリシア人が *phainomenon* と呼んだものとどう関わるのかが問われうる。vgl. Bd. 29/30, S. 38, Bd. 55, S. 205

(本学文学部助教授・倫理学)